あるじでえ

No. 4

世田谷区教育委員会　民家園係
〒157-0067　世田谷区喜多見5-27-14
◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03(3417)8492
◎ 岡本公園民家園
☎ 03(3709)6959

平成元年９月１日　発行
平成８年７月　増刷
平成12年11月　増刷
平成28年７月　増刷

恵比須講

〈恵比須〉

恵比須は七福神（恵比須・大黒天・毘沙門天・弁財天・布袋和尚・寿老人・福禄寿）の一つとして広く知られている神様です。右手に釣竿を持ち、左脇に鯛を抱えた姿の恵比須の神像は、今日でも多くの村々で見受けられます。

恵比須はもともとは漁民が大漁を願う対象として信仰していたようですが、後には商業の神様、あるいは農業の神様としても信仰されるようになりました。

漁村では、くじら・さめ・いるかをエビスと呼んだり、海岸に流れ寄る漂着物、あるいは海中から拾い上げた石などをもエビスと呼ぶことがあります。また、漂流している水死体をエビスと言ったり、その水死体を埋葬し、供養して後に恵比須神として信仰する伝承を聞くこともできます。こうしたことから考えてみれば、恵比須を福の神として信仰する背景には、他界から福がもたらされるとする日本人の考え方が潜んでいるように思われます。

さて、恵比須講は恵比須を祭る行事ですが、その期日は地域によって異なり、１０月２０日、１２月２０日、1月２０日、2月２０日など様々です。町中では１２月２０日に、農村では１０月２０日に行う所が多いようです。

東京の西多摩地方では“エビスコウ”と言って、1月２０日に恵比須・大黒像を床の間に祭り、色々な御馳走（小豆御飯・鯛や鯖・大根の酢の物・人参と牛蒡の煮付け）を供えます。夕方にはうどん・そばを家々で作り、それをやはり恵比須と大黒像に供え、その後家族の者が揃って食べます。

ところで、中世末に商人達が恵比須講中と呼ばれる祭祀団体を作るようになったのが恵比須講の始まりと考えられています。同業者達が講宿に集まり、福神である恵比須を祭り、商売繁盛を祈りながら、色々な商売上の相談を行いました。その後近世になると、一般の家庭でも年中行事の一つとして恵比須を祭り、来客をもてなして家内繁栄を祈りました。こうした家毎の行事も恵比須講と呼ばれましたが、集団的な講の行事とは関係なく、単に恵比須を祭る祭日としての意味を持つものでした。今日の世田谷区内でも、恵比須講と言えば各家々で恵比須に供物を供える行事のことを言います。

〈講について〉

講とは仏寺を中心にして行なわれる、仏典の講説会やその団体を意味するものでした。しかしその後、講の名称は民間でも広く使われるようになり、宗教的・経済的な目的を果たすために、同心者が結成する集団をも講と呼ばれるようになりました。宗教的な講には大山講・御嶽講などがあり、経済的な講としては無尽講・頼母子講などがあります。

区文化財資料調査員　　高見寛孝

十五夜・十三夜

〈名月鑑賞〉

旧暦８月１５日の夜を十五夜、９月１３日の夜を十三夜と称して、月を鑑賞する行事が日本各地でおこなわれています。旧暦８月１５日の夜は仲秋の名月ともいい、一年のうち最も月が美しい日とされています。

世田谷区内では月見の晩に、縁側にススキやヨトドメ（ヨツドメとも呼ばれる）、オミナエシなどを徳利などにさして飾り、米の粉で作った月見団子を十五夜には１５個、十三夜には１３個供えるということがおこなわれています。団子以外にも、各家々で穫れた里芋・薩摩芋・柿・栗・梨などを供えたり、おはぎや豆腐を供えたりする所もあります。また十三夜には特におはぎを供えるものだと伝えている所もあるようです。

昔は月見の晩に、子ども達が釘の付いた竹の棒で、供え物を引っ掛けて盗んで廻ったということです。供え物がなくなると、大人達はお月様が食べたといって、子ども達の行動を見てみぬふりをしました。

また、十五夜か十三夜のどちらかだけ月見をすることを嫌う、いわゆる片月見（片見月）をしてはならないという言い伝えがあります。

〈稲作と十五夜〉

月見をすることに加え、外にも十五夜には様々な行事がみられます。宮城県名取郡ではこの日を「稲草祭」と呼び、苞（藁などを束ね、中に食品などを入れて包みとしたもの）に赤飯を入れ枝豆をさして、狐のいそうな山へ供えに行ったといいます。熊本県阿蘇地方でも、月の数（閏年は13）だけ稲穂を抜き、作神様にホカエル（穂掛けの意、穂掛けとは刈り初めの稲穂を家の神などに掛け供える行事）といっています。さらに、早く出た稲穂や焼き米を神仏や月に供える地域もあります。こうした事例は、稲の収穫儀礼の一つを示すものと思われます。

〈芋名月〉

一方十五夜を「芋名月」と呼んで、里芋その他の芋類を主に供える地域があります。たとえば、奈良県宇陀郡では里芋を掘ってきて、きれいに洗い、芋の葉に盛って供えるということです。鳥取県伯耆地方ではこの日を「芋神様の祭」といい、また芋を掘り始める日ということから「芋の子誕生」とも呼び、掘ってきた芋の子を小豆飯と一緒に供えます。旧暦８月の中旬はちょうど芋の収穫時期にあたり、供え物として特に芋を重要視したのでしょう。芋の収穫を祝う、収穫祭としての意味もあったかと思われます。

以上あげた稲作や畑作（芋を中心とした）の儀礼の外に、十五夜には藁苞で地面を打つ、綱引きをする、相撲をとる、蓑笠をつけた訪問者が来る、などの行事がおこなわれています。

十三夜の月見風景（岡本公園民家園にて）

区文化財資料調査員　尾　上　一　明